

JK&29 プロローグ



——わたしの『はじめて』は槍羽さんだったんです。責任、取ってくださいね？

死刑宣告だった。

俺の名は槍羽鋭二。二十九歳のサラリーマン。

東京の片隅で細々と働いている社畜にとつて、これは社会的な死を宣告されたに等しい。相手は、十五歳の高校一年生女子。

いわゆるJKである。

子供と大人の真ん中に「ちまつ」と挟まっている、微妙な年頃。身体はもうほとんど大人だが、精神はまだまだ未熟で幼い。そんな、危うくて壊れやすいイキモノ。

そんなイキモノと、俺は付き合っている。

会社からの「業務命令」で。

……意味がわからないだろう？

もちろん、俺にもさっぱりわからない。

こう見えて勤務態度は真面目そのもの、部下からもそれなりの信頼を得ている（主にパートのおおちゃんからだ）。趣味はアニメと漫画とラノベと貯金。課金兵の妹を養いつつ独自の自由を謳歌し、はるか遠くの年金生活に思いを馳せる一般市民だ。

『JKと付き合えるなんて最高じゃん！』

そう思うか？
本当に？

カネを払ってでもJKと付き合いたい、と願う男が多いことは知ってる。

だが、せいぜいだって「隠れてコソコソ」するのが前提だろう。同僚や家族に「俺、今JKと付き合ってますー」なんて言えるか？ バレても平気でいられるか？ 答えはNOだ。十八歳未満の少女と付き合うということは、それだけで、人生に爆弾を抱えることになる。

ご託はこのくらいにして、物語を始めよう。

まずは彼女とのなれそめから。

出会いだけは普通の恋と同じだった、あの梅雨の日のことから。

第1章

休日に休めるなんて、最高のぜいたくだ。

週休二日制とは言うけれど、土日連続で休めることはなかなかない。少なくともここ三ヶ月間は一度もなかった。

六月に入ってようやく仕事が落ち着き、ひさびさの土日連休。たっぷり満喫しよう。

槍羽鋭二。昭和六十二年・一九八七年生まれの二十九歳会社員。

中学二年生の妹と、都下のマンションで二人暮らし。

結婚の予定なし。彼女も、なし。

こんな俺のベストブレイスは、近所のネットカフェだ。土日は昼まで寝て、起きたらここに来て五時間千五百円のバックでがつつり漫画を読みながらすすす。

俺は漫画が好きだ。小説も好きだし、アニメも映画も好き。ゲームは学生時代によくやったけど、就職してからは時間がかかりすぎるのでやれてない。

ようは「物語」が好きなのだ。

仕事で忙しいのは社会人の宿命、給料もらってる以上は当然だけど、本を読む時間が削ら

れるのだけはな……。

もつとも俺なんかまだ全然マシで、SEになった田舎の友人は「始発で帰宅キメてから『忙しい』と言って欲しい」とレッドブルの空き缶に囲まれた勇姿をLINEにあげていた。「体壊すなよ」なんて返信した翌日、始発のホームでゲロをぶちまけて入院。退院後は会社を辞めて頭を丸め、仏門に入ってしまった。どう考えても俺は恵まれている。残業だって、一番忙しい月でも八十時間くらい。平均百時間以上でようやく社畜完全体らしいので、俺はずっと成熟期でいようと思う。鳴り響くなよ brave heart。ワープ進化ダメ絶対。そんなことを思いながら、読み終えた漫画を閉じる。

「ふう……」

深い満足とともに、リクライニングシートにもたれかかった。面白かった。面白かったけど、この漫画の最終回が読めるのはいつなんだろう。「大人になる頃に完結していると思っていた漫画」がこれだけ増えると、実はまだ二十世紀なんじゃね？　みたいに思えてくる。おはようって言ってた俺が今は大地を踏みしめているなんて。オレン家にやっと思り着いたところだなんて……。

サイレントモードにしていたスマホを見れば、メールの着信が二件。

一件目は妹。「帰りにポテチと林檎カード3k おねがいします」。こないだまとめ買いたしたのもう食ったのかよ。林檎カードは完全スルーだ。俺はあいつの射倅心を満たすため

に働いてるんじゃないか。

二件目は、珍しいことに、会社の部下から。「お休み中失礼します。近くまで来たので、ご夕飯一緒にいかがでしょうか。ご迷惑でしたら返信は不要です」。いかにもあいづらしい堅い文面だ。もうちょっと肩の力を抜けば、「冷凍美人」なんて陰口を叩かれることもないだろうに。

悪い。妹と約束があるから。

そう返信してから、大きく伸びをして立ち上がる。

リミットまであと一時間半、もう何冊か読めるだろう。

読み終えた漫画を返却して、新たな作品を物色すべく本の森を歩き回る。

そうだ、ひさしぶりにラノベについてみるか。

妹が最近見ていた、主人公が骸骨の変わったアニメ。原作は確かライトノベルのはずだ。あれはすごく面白かった。過激な部下に苦勞する元・社畜の主人公に共感MAXである。そんな歳になった自分が誇らしいやら、悲しいやら。

ラノベの文庫棚に行き、白や青や緑の背表紙をざっと眺めていく。……ないな。この店はラノベの品揃えも豊富なはずだが、文庫じゃなくて単行本なのか？

単行本の棚に視線を移すと、制服姿の女の子が棚を物色しているのに気がついた。

……へえ。

クオリティ激高。

透明感のある白い頬^{ほお}。横顔でもわかる整った目鼻立ち。赤いチェックの膝丈^{ひざだけ}スカートから伸びる脚はすらっとして滑らか。清純さを醸^{かま}し出す漆黒^{しじく}のロングヘアはふんわりと艶^{つや}やかで、薄暗い店内がそだけ白く切り取られたかのように輝^{きら}いている。

品の良い白のブレザーに見覚えがある。会社近くにある名門女子高の制服だ。

彼女は一番上の棚にあるラノベを取ろうとしているようで、「ん〜っ、む〜っ」と唸^{うな}りながら手を伸ばしている。そのたびに、胸元^{むねもと}の校章^{こうしょう}をはち切れんばかりに押し上げて豊かな横乳^{よこちち}がむによん、もによん、と揺^ゆれているのが反則^{はんじ}級^{けい}。でかい。これはおっきい。おっぱいの二世帯住宅^{にせたいちゅう}。制服に包まれた巨乳^{きょにちち}って、なあ……。卑怯^{ひきょう}。

男^{おとこ}なら誰も^{だれ}もが惹^ひきつけられる瑞々^{みずみず}しい美少女^{みしょう}には違^{ちが}いがない。が、それゆえに、頭のなかでアラートが鳴^なり響^{ひび}く。

俺^{おれ}はJKが苦手^{がた}だ。

こいつらは、自分たちが「ブランド」であることを知っている。市場価値が高いことを知っている。制服の魔力^{まじり}でみんながちやほやしてくれる、甘く見てくれることを知り尽くして、我が物顔^{わがものかお}で世間^{よかん}を渡^{わた}り歩^あいている。

油断^{ゆだん}のならない連中^{れんちゆう}だ。

みんなに好かれてるもの、みんなが褒^ほめるものには絶対^{ぜったい}対^{たい}毘^ひが仕掛^{しか}けられている。



そんなJ Kの白い指先は背表紙をかするばかりで、一向に取れる気配がない。だったら受付で台でも借りてくればいいのに。こいつがどかないと、いつまで経つても本が取れない。仕方ねえな……。

「俺が取るから、どの本か教えてくれ」

彼女はびつくりしたように俺を見上げて、澄んだ目を大きく瞬かせた。近くで見ると、本当にドキリとするほど可愛い。「綺麗」より「可愛い」寄りで、表情もどことなくあどけない。制服のことを知らなければ中学生に見えたかもしれない。どことなく、人に馴れない子犬みたいな雰囲気があった。

「い、いえつ。あの、大丈夫ですかっ」

おびえたように長いまつげを伏せる。めっちゃビビられてる。さすが俺。目つきの怖さには定評のある俺。伊達に入社当時「あのひと、趣味で人殺してそう……」とか言われてない。「俺もその棚見たいから、どれを取るんだ？」

「ひ、ひとりですますから」

今度はちゃんと目を合わせてきた。意外と芯はしっかりしてるようだ。たいていの女は、俺がひとにらみするだけでそそくさと逃げていくからな。

「じゃあ脚立か何か借りて来るか？」

すると色白の頬が真っ赤に染まり、

「だつ、だいじょうぶだもん！　ちゃんと届くもん！」

怒りに火をつけてしまったようだ。思春期の繊細メンタル、めんどくさい。

彼女はムキになってまた手を伸ばし始めた。ぬにヤーっ、くにヤーっ、というわけのわからない掛け声とともにローファーの踵を何度も浮かせる。そのたびに制服が体に張りつき、大ぶりの桃みたいな胸のかたちが強調されてムチリと浮かび上がる。もはや凶器だなこれ。

三回目のトライでようやく指が背表紙をつまむ。

ぶるぶると覚束ない手つきで本を抜き取ろうとして、そこでバランスを崩し――

「危ない！」

とつさに彼女の腰を引き寄せ、背中を丸めて覆い被さる。

つむじに衝撃が来た。ひとつ、ふたつ、みつつ着弾。単行本は文庫よりダメージ大、目から火花が出た。床に落ちた黒い表紙が目に入る。あ、骸骨。こんなところにあったのか。落として申し訳ない。後でちゃんと拾うからな。

「大丈夫か!？」

痛みをこらえながら、彼女に呼びかける。

「どこかぶつけないか？　ケガは？」

彼女は青ざめた顔で何度も頷いた。どうやら無事のように。良かった。

「まったく、お前なあ……」

無事だとわかれば、言いたいことがある。

見知らぬ女子高生だろうと、とびきりの美少女だろうと関係ない。俺は大人だ。物わかりのいい優しい大人じゃない。他人様のガキでもガンガン叱りつける大人だ。

——つまらない意地を張るな、

——店に迷惑をかけるな、

——ちゃんと先のことを考えて行動しろ、

いくつか言うべきことはあったが、俺が口にしたのはたったひとつだ。

「こういう時は、大人を頼れ！」

ゲンコツをひとつ、彼女のつむじにゴツンとお見舞いした。

「これでおあいこな」

俺は三発食らったけど、一発で勘弁してやる。

「……………」

彼女は呆然と俺を見つめ返す。

叱られてふてくされるか、あるいは泣き出すかのどちらかと思つたのに、この反応は意外だ。今起きたことが信じられないという表情が、愛らしい顔にありありと浮かんでいる。

なんだろう、この……妙な感じ。

生まれてはじめてゲンコツをもらいました、みたいな顔。

「ごめんなさい。かばっていたらだいて」

小さいが、はつきりとした声で彼女は謝罪した。シユンとした声でないのが、やっぱり意外だ。どこか嬉しそうというか……いや、そんなはずはない。

自分が高校生の時を思い返せば。

大人に叱られるなんて、ただウザいだけだった。

「お前をかばったんじゃない。本をかばったんだ」

床に落ちた骸骨の本を拾い、注意深く埃を払った。

彼女の視線が俺の顔と表紙を行ったり来たりしている。彼女の目当てでもこれだったらいい。……ちえつ。

「これ、きつと面白いぞ」

彼女に本を手渡し、物音を聞きつけてやってきた店員に事情を説明して、そのままブースに伝票を取りに行つて会計をすませる。時間には早いがしょうがない。トラブルが起きた時はすみやかに立ち去るべし、二十九年の人生で得た経験則だ。

ちらりと店内に目をやると、彼女と目が合った。

彼女はまだ本棚のそばにいて、俺が渡した本を胸に抱きしめている。

ぼうつとした、赤い顔。

……やっぱり、どこか打ったのか？

念のため病院に連れて行くべきだったかとも思うが、これ以上はおせっかいの領域だろう。妙な真似まねをして下心があると思われるのもつまらない。十八歳未満との交際は「淫行いんこう」になるおそれ。疑いをかけられるだけでも社会的に死ぬ。

自動ドアをくぐって外に出て、深呼吸する。

「ふう……」

エアコンに冷やされた肌に、六月の生ぬるい風が心地いい。今日は梅雨つゆの晴れ間、薄い雲がもやのようにかかる青空が、薄暗い店内に慣れた目に沁みた。

時間と金を多少損したが……ま、いいだろう。

たまにはあんな突発イベントも良い。毎日毎日会社と家の往復だけじゃ息が詰まる。十代の頃ならラブコメのフラグとなるイベントだが、ゲンコツで自分から折りにいくのが二十九歳エディション。もう、フラグは立てるより折る方がいいと学んだ、いや、枯かれた。

さて、と。

家で待ってるバカ妹に、ポテチと林檎カード買って帰るか。

千円分だけな。

※ ※ ※

彼女とはそれきりだと、俺は思い込んでいた。

ネットカフェは駅前にもあるし、もうあの店に彼女は来ないだろう。怖い大人がいる場所に子供は近寄ったりしない。今ごろ友達と「きのう目つき超ヤバイオヤジに声かけられてえー」なんて話してるだろうさ。

目つきの怖さには自信がある。

入社当時、俺は「趣味で人殺してそう」などと言われて社内で孤立した。めげずに一年間仕事を頑張がんばった結果、「仕事で人殺してそう」と言われた。さらに一年働いて、「もしかして殺してないのかも？」と言われるようになり、「大丈夫、彼は無実だ」という評判を勝ち得たのは、入社三年経ってからだった。世の中捨てたもんじゃナイナー。

人は見た目が九割。

……とまでは言わないが、見てくれが悪いと人生の難易度はHARDモードになる。

社会人になってこそ、しみじみと感じる世の中の真理。どうして学校は、こういうことを教えないのか……。九九や漢字と同じくらい大切なことだろう。学力で学校を分けるなら、外見力でも分けるや。

そんなことを思い出しつつ――。

日曜の午後一時きっかり。

妹と家で昼飯を食った後、俺は再びネットカフェを訪れた。読み損ねたラノベを今日こそ

読んでやる。待つてろよ骸骨王。今日こそ御身の前に。

受付をすませてウツキウキでラノベコーナーに向くと、そこでは信じられない光景が繰り広げられていた。

「うにゃ〜っ、ふにゃ〜っ」

「……………」

昨日の女子高生が、または本棚の前で背伸びを繰り返している。

日曜日なので制服じゃない。白いVネックの上からピンクのカーディガンを羽織り、花柄のフレアスカートに合わせている。特別おしゃれというわけではないが、控えめな品の良さを感じさせるコーディネートだ。……Vネックをばつん、と盛り上げている。こだけは、控えめじゃないが。

そんなことより。

どういふつもりなんだ、こいつ……。

「う〜ん、なかなか、届きませんっ」

なんて、独り言までつぶやいてやがる。やたら棒読みだ。

「でもでも、がんばるぞお〜。取れるまでがんばるぞっ。うにゃ〜っ。ふにゃ〜っ」

「……………」

滅茶苦茶わざとらしい。

しかも、チラチラとこつちを見ている。俺の存在に気づいている。昨日ゲンコツを落とした俺の存在をだ。期待をこめた瞳で、見てきやがる。

「おい」

近づいて声をかけると、彼女は長い髪を揺らして振り向いた。ふわりと、毒のような甘い香りが鼻をくすぐる。私服の時は香水をつけるのだろうか。

「は、はいっ。なんでしようっ?」

「なんでしようじゃねえよ。何してんだ昨日の今日で」

「本を取ろうかと、昨日の本、すっこオモシロカタので、続きを」

たどたどしく答える。どうやら彼女も骸骨王に膝を屈したらしい。さすもモ。

「……………」

「……………」

言葉が見つからず、お見合いになる。

なんだか彼女の頬が赤い気がするの……いや、フラグは昨日折ったはずだ。ともあれ、このままでは埒があかない。

一巻と二巻をまとめて本棚から取り、二巻を彼女に渡してやった。

「あ、ありがどうございませしゅ! ……ございませす」

噛んだのをわざわざ言い直した。なかなか律儀な娘さんだ。

何か声をかけてもらえらるのを待つてるかのように、じっと俺のを見上げている。もし彼女が子犬なら、しっぽがしばしば振られていたことだろう。庇護欲をかきたてられずにはいられない、強烈な吸引力を秘めた愛玩犬のまなざしだった。

だがアンチJKの俺、このイベントをスルー。

「じゃあな」

「え、ええ……」

何か言いたげな彼女を振り切って、自分のブースへ戻った。

昨日みたいなハプニングが毎回続いたら、たまったもんじゃやない。俺は静かに本が読みたくてここに来てるんだ。ネットカフェに出会いを求めるのは間違っているだろうよ。

四畳ほどのブースに入り、リクライニングに深く腰を沈めて、黒い表紙を愛おしげに撫でてからページを開く。繰り広げられる骸骨王の異世界冒険譚に、あつという間に虜になった。なんていうか、あれだね、部下に振り回される御方の苦勞、他人事とは思えないね。

十代の頃の俺じゃ、この作品の魅力を完全には理解できなかったかもしれない。今、二十九歳でこの作品に出会えたことに感謝しよう。

二時間かけてじっくり堪能した後、次の巻を取りに本棚へと向かった。

そこで、まともや待ち受ける衝撃。

「うにゃ〜っ。ふにゃ〜〜っ」

「……………」

その掛け声、なんとかならないんすか？

しかも今度は本棚のそばに台が置いてある。店員が気をきかせて運んできたのかもしれない。本棚に手を伸ばす彼女の目には入っていないようだが。

またスルースキルを発揮したいところだが、続きを読みたいのでそうもいかない。

「何やってんだ？」

彼女はぱつと明かりがついたみたいに表情を輝かせ、さつきと同じ子犬の目で俺を見上げた。しばつ、しばつ。見えないしっぽが一生懸命に振られる。

「二巻を読んでしまったので、今度は三巻を取ろうか」と

「そこにある台を使えばいいだろうが」

「……………」

沈黙が場を支配した。

彼女は台と俺の顔を見比べた後、シヨンポリとうなだれた。台があることは知っていたらしい。なら使えばいいものを、何故か実行しない。「むむむ」と頭を抱えるポーズで葛藤し、意を決したように顔を上げ、本棚に向き直るとまたもや背伸びして、

「うにゃ〜〜っ！ ふにゃつ〜〜っ！」

「いいかげんにしろ！」

キューティクルが作る天使の輪に、チョップを一発。

「なんのつもりか知らないが、大人をからかうんじゃないねえ」

「ま、また叱られちゃった……」

ぶたれた頭をさすりながら、何故か嬉しそうな彼女。アホなのか？ それともドMなのか？ その歳でもう道を踏み外してんのか。

「もう二度としないか？」

「しません。すみません」

「絶対、しないか？」

「はい。わたしは悪い子でした。海よりも深く反省しています」

うつむいたまま答える彼女。

長い髪でカーテンされていて顔が見えない。

「……」

「……」

首をひねって下から覗き込むと、こみあげる喜びを押し隠すように頬をひくひくさせているのが、艶やかな髪の間隙から見えた。

「てめえ反省してないな!？」

「ごめんなさいっ!」

謝りながらも嬉しそう。くそ、なんて器用なやつだ。

「あの、もう一度あなたとお話がしたくて。この本棚で待っていれば、会えるかなって」

「は？ だったら普通に声かければいいじゃないか」

「最初はそのつもりだったんですけど。エ、エへ……」

照れくさそうに身をよじる彼女。そんな風にモジモジするだけで、カーデイガンの下で育ちまくった果肉が窮屈そうに暴れる。Vネックの襟元に隙間ができて、俺の位置から柔らかな谷間が覗けてしまう。無防備すぎんだろ、こいつ。男性の視線をまるで警戒していない。危なっかしい。

「わたし、今まで一度も叱られたことがなくて。あんな風にゲンコツしてもらったの、はじめてだったんです。だから……嬉しくて」

「嬉しい？ ゲンコツが？」

やはりドMなのかもしれない。妙な性癖の子と知り合ってしまった。一度も叱られたことがないというのどうなんだろう。温室育ちのご令嬢なのか？

「あ、あの、お時間ありませんか？ 良かったら、すこしお話、し、しましえんか……」

めっちゃ噛みまくりんぐ。噛むたびに照れてジタバタするのがちょっと面白い。

このネットカフェには共有スペースが併設されていて、ここでは普通の喫茶店のように話ができる。正直、早く本の続きを読みたかったのだが……こいつ、ほっといたら毎週本棚

の前で待ち構えてそうだな。

「……じゃあ、ちよつとだけな」

「や、やったあ♪」

ぎゅっ、と可愛らしく拳こぶしを握りしめる彼女。ガッツポーズかこれ。わざとやってるならあまりのあざとさに張り倒したくなるどころだが、おそらく天然。だって突き上げた拳を本棚に強打して悶絶もんぜつしてるし。やばいこいつマジ芸人。

ドリンクバーで飲み物を取って共有スペースに移動し、窓際まどぎわの席に座った。俺はコーヒー、彼女はいちごソーダだ。

移動する時、店内の視線が俺たちを追いかけるのがわかった。彼女のルックスにまず目を奪われ、それから、一緒にいるのが俺であることに首を傾げるのだ。親子には見えないし、兄妹にしては似てない。恋人？ いや、援交？ そんな風に言われてるような気がして、冷や汗が出る。大丈夫、一緒にお茶を飲むだけだから淫行にはならない。自分に言い聞かせて平静を保つ。

席につくと、まず彼女が口を開いた。

「あの、お兄さんは……」

「お兄さん？ おじさんでいいよ俺なんか」

お兄さんと呼ばれて喜ぶような男にはなりたくない。若いと思われて喜ぶのは女だけだ。

「じゃ、じゃあ、お名前を」

「槍羽銃やぶりゅう二。サラリーマン」

「南里花恋みなりななこです。十五歳」

「あれ？ 十五歳って、中三なんじゃ？」

すると彼女はぶんぶんっと激しくかぶりを振った。

「高一ですっ！ 二〇〇一年一月の早生まれなだけで、れっきとした高校生ですからっ！」

どうやらこの子、子供扱いされることを極端に嫌がるらしい。

いや、それよりも――。

二〇〇一年だと!?

じゃあ何か、こいつ、アギトやもっつと！やティマーズの頃に生まれたったのか？ 発売されたばかりのGBA買ってくれえええと中二の俺がお袋にねだってた頃に？

「二十一世紀生まれが、もう高校生になってるのか……」

自分が旧世紀の人間だと突きつけられたようで、ずんと肩が重くなった。若くなくても一向に構わないが「古い」と言われるのは堪たえる。この違い、わかってもらえるだろうか。

「あの、どうかしましたか？」

「……なんでもない。『かれん』っていうのは、どういう字を書くんだ？」

「草花の花に、恋愛の恋です」

漢字のチョイスにも漂う二十一世紀感。

名前の漢字に敏感なのは、俺の職業のサガだ。

「檜羽さん、お仕事は何をなさってるんですか？」

「なんだかお見合いみたいだな。新世紀生まれのわりに性格は古風なようだ。一周まわって、
 というやつかもしれない。」

「自動車保険のコールセンターで働いている。CMでよく流れてるだろ、『クルマの保険、見直してみませんか？ お見積りは今すぐネットからお電話で！』って。あれ」

「あー。アルカディア保険とかですか？」

「へえ、よく知ってるな。まさにそのアルカディアだよ」

すると彼女はまんまるに目を見開いた。ただでさえ目が大きいのに、そんなことをされると盛りすぎたブリクラに見える。

「……………り、立派な会社ですね！」

笑顔がひきつっている。

ウチの会社に何かあるんだろうか。ご両親が加入してるとか？ だとしたら下手なことは言えない。心の警戒レベルを一段階引き上げよう。

「えっと、じゃあ、ご趣味は？」

彼女から話題を変えてきた。ますますお見合いである。

「ありきたりだけど、読書だな。今はもう休みの日にしか読めないけど」

「花恋も読書好きです！ 漫画も小説も読みます！ たくさん！」

彼女は興奮したようにテールに手をつき、身を乗り出してきた。下向きになった釣り鐘型の豊かな丸みがぶるりと揺れる。胸元に切れ込むVネックの隙間から少女らしい薄いピンクの下着が——やめる。その無自覚な凶器をしまえ。俺を殺す気か社会的に。

「普通の小説や少女漫画も好きですけど、どちらかかっていうとラノベや少年漫画ですね。異世界に行ったり異能で敵と戦ったり、そういう夢いっぱいの設定に憧れちゃって……あ、男の子みたいだっと思っていました？ ひどーい、普通に少女向けだっって読むんですから！ でもやっぱりファンタジー系が多いかなあ。最近のおすすめはですね……」

組んだ両手を胸に密着させるものだから、ふくらみがむぎゅつ、と潰れてすさまじい形になる。服越しにくっきりと浮かんだ深い谷間に両手が挟まって埋もれる。むにゅむにゅ、むにゅん。だからその凶器を……いや、もういい。

それにしても——。

本当に好きなんだな。本。

さっきまで噛み噛みだったのが噛みたいによどみなく話す。話しながらも表情がくるくる変わって、まるで登場人物になりきってるかのようだ。こんな楽しそうに本の話をするなんて、はじめて彼女に親近感がわいた。

「自分では書かないのか？」

軽い気持ちで聞いてみた。すると過激な反応が起こり、
「はいっ！ 書いてます！」

勢いよく手を挙げて彼女は立ち上がった。店内の注目がまたもや集まる。目立つなよ頼むから。視線で座るように促すと、彼女はエヘへと笑いながら頭をかいた。……JKのこういう仕草は国が規制したほうがいいな。男を惑わす元だ。

座り直すと、おずおず上目遣いに俺を見る。

「あの、語ってもいいですか？」

「うん？」

「実はわたし、小説家を目指してて。ひとりで書きためてるんです。まだ誰にも見せたことないんですけど。本気なんです」

「……………へえ」

思い切った告白だ。

小説家なんて、人に知られたら恥ずかしい夢の筆頭じゃないか。こっそり書いてPCの奥深くのフォルダにしまいこみ、時々読み返して身もたえして……普通はそんなもんだ。今は投稿サイトが充実しているから昔よりオープンとはいえるが、それもwebだからこそだろう。そんな一大事を初対面の俺に話していいのか心配になるが、誰にでも夢を言いふらすよう

なタイプには見えない。現に彼女、ゆでタコみたいに真っ赤だし。めっちゃ恥ずかしがってる。

それでも彼女はうつむかないし、顔を逸らしたりもしなかった。

まるで愛の告白の返事を待つみたいに、潤んだ瞳で俺の反応を窺っている。

……………

「俺も、学生時代は目指してた」

言葉がぼろっと口からこぼれていた。おいやめろという声が心のどこかで聞こえたが、何故か止まらない。

とっくに忘れ去ったはずの気持ちが、じわじわと染み出していく。

「大学四年間、ずっと書いてばかりいた。四年間で芽が出なかったらあきらめるって、親と約束してな。一度は最終選考にまで残った。webに選評が載って、嬉しかった。……結局、そこまでだったけどな」

彼女の熱気にあてられでもしたのだろうか、自分で自分に驚く。こんなこと話すつもりはなかったのに。友人にも話したことがない、墓場まで持って行く黒歴史だったはずが。

これだからJKは嫌いなんだ。

もうとっくに枯れた果てた大人の情熱に、ほんの少し、火をつけてしまう。

「——やっぱり」と。

彼女は微笑^{ほほえ}んだ。

心の警戒網を一撃で突破され、うっかり見とれてしまう。

今日見たなかで一番可愛い表情だった。

「槍羽さんは、きつと、そうだと思います。花恋にはわかるんです」

「なんだよ、そりゃ」

「だって槍羽さん、花恋をかばった時、落ちた本のことを申し訳なきように見てたでしょう？ ああ、この人は本を大切にしているんだなあって、感動しちゃいました。物語を愛する人に悪い人はいないって、お父さんも言っていました。花恋もそう思います」

「……別に。店の本だから気になっただけだ」

なんだか面白くなくてそっぽを向く。くすくす、彼女の笑い声が聞こえる。俺は十四も年下のガキにもてあそばれてるのか？ くそ。

お返しに、興奮すると一人称が「花恋」になることを弄^じってやるうかと思っただが、あまりにも彼女が楽しそうなので止めた。子供っぽいけど、その方がしつくりくる。

「いつか槍羽さんに読んで欲しいです。花恋の小説」

「まあ、機会があったらな」

大人語で「お断りします」の意であるが、彼女には通じなかったようで「はい！」と嬉しそうに頷いた。いちいち調子が狂うなまったく。

その時、テーブルの上に置いていたスマホが震えた。メールの着信だ。相手は妹で、『なんか工事の人？ が玄関に来てるよー。あたしじゃわかんないよー。たすけて〜』。そういえば、水回りの修理を頼んでいたのを忘れてた。年頃の妹ひとりの部屋に、男を上げるわけにはいかない。今すぐ戻らなくては。

「急用ができた。これで失礼する」

そう言って立ち上がると、彼女はみるみる曇^{くも}って「そうなんですかあ……」とくらくらい表情でつぶやいた。おいやめる。こっちまで曇^{くも}ってくる。

「あの、あの、じゃあこれっ、どうぞー」
と、紙の手提げ袋を差し出す。

俺のような野暮^{やぼ}天^{てん}でも知ってる、高級菓子店の紙袋だった。前にうちの女性スタッフが「高いうえに並んでもなかなか買えない」と休憩室で愚痴^{うち}ってたやつだ。

「こんな高価な品はもらえない」

「あ。えつと、ちがくつて。中身はわたしが焼いたクッキーなんです」

「……………」

それはそれで重たい。

突き返して再度フラグをへし折っておくべきかと悩んだが、昨日ほど冷酷になれなかった。彼女の夢を聞かされたことで、情が湧^わいてしまっている。自分が安い男だと実感するのはこ

ういうときだ。出世できねえな、と思うのもこういうとき。

まあ、そもそも、二十一世紀生まれと聞いてしまったら。

フラグだのなんだのと警戒すること自体、自意識過剰かもしれない。

一度話ただけで「あいつ俺のこと好きなんじゃね」的な小学生理論、やめようぜ二十九歳。「わかった。ありがたく頂戴する」

彼女はホッと顔をほころばせる。白い頬が上気して桜色の紅がさし、今まで以上に瑞々しく見えた。

「また、ここで会えますか？」

「仕事が忙しくなければな」

挨拶もそこそこに俺は歩き出した。さつきからもう、周囲の視線が刺さる刺さる。ひそひそと聞こえる話し声が耳に痛い。誰かが携帯を取り出すたびに「通報？」と心臓が跳びはねる。カネを払ってでもJKと付き合いたい、という男が多いと聞かけれど。

俺なら、カネを払ってでも逃げ出したいね。

※ ※ ※

俺が中学生の妹と二人暮らしであることには、多少の説明がいるだろう。

両親は父母ともに健在であり、北陸で小さな工場をやっている。親父は昔気質の職人で頑固一徹。俺とは折り合いが悪く、家に帰ればしょっちゅう喧嘩だ。お袋に言わせれば、「あんたはお父さんそっくりよ」ということなのだが、俺はあんなハゲじゃない。近い将来、遺伝子との聖戦を繰り広げることになるだろうが、必ず勝利してやる。

しかしこの親父、妹にだけはゲロ甘。

妹の入園式の時、講堂に集まった三十人ほどの園児をジロジロと眺めた挙げ句、「よし、うちの娘が一番可愛いー」などと叫んで他の父兄のひんしゆくを買った逸話があるくらいだ。歳を取ってからできた子供は可愛いというが、愛があふれるにも程がある。

そんな愛娘が、小六の春にこう言い出した。

「あたし、東京の中学に行きたいの。兄ちゃんの家から通うの」

この時の親父の落ち込みようだった。もう……。マリアナ海溝まで沈んでいきそうだった。「鋭」を殺して俺も死ぬ」などと暴れたらしい。息子を巻き込むじゃねえ。

妹はそれこそ学校で一番一番というレベルでデキる優等生だった。塾の先生からも私立中学の受験を勧められていたらしく、それならいっそ東京の有名校へと考えるのはおかしくない。だが、俺は知っている。

妹が東京に来たがった、真の理由。

それは――

「あゝ。極楽極楽。ふえつふおん♪」

ソファにふんぞり返り、ペットボトルをラップバ飲みして可愛らしいげっぷをかます。

まだ夕方だというのにパジャマ姿で、愛用の毛布をかぶり、十畳のリビングでゴロゴロゴロ意惰たいだの限りを尽くす女子中学生こそ、我が妹・檜羽雛菜ひなな（14）である。

「一日じゅうお菓子食べてもゲームしても怒られないなんて、実家じゃこーはいかないよねえ。兄ちゃん」

今日二箱目の「アポロ」を開ける。俺の給料がヤツの胃袋に消えていく。

なんのことはない。親の目を逃れてゴロゴロぬくぬくしたただけなのである。

成績が抜群に良かったのも、東京に行きたい一心で必死に勉強した結果なのだという。

夢が叶かなった今、雛菜の成績は下落の一途である。

親父に甘やかされたぶん、兄である俺が厳しくしなくては。

「ね、兄ちゃん。ポテチ食べていいい？」

「コンソメとうす塩とりの塩、どれかひとつだけな」

「えゝ。ガーリック味は？」

「ない。我慢しろ。また今度安売りの時に買ってやるから」



「わーい、だから兄ちゃんすきっ！」

よしよし。厳しくしないとな。

我慢したご褒美に、今朝ネット通販で届いたばかりのやわらかクッションを渡してやった。さっそくクッションに抱きついて、雑菜は気持ちよさげなため息をつく。

「はー。やつば東京はいいよね。漫画の発売日も早いし、深夜アニメもいっぱいやってるし、ネットで買い物しても来るの早いしさ。ずっとこんないいところに住んでたなんて、ずるいよ兄ちゃん！」

「知るか」

ぐーたら妹はほっといて、修理してもらった蛇口の具合を確かめる。よし、水漏れなし。完璧な仕事だな業者のおつちゃん。物腰も丁寧だったし、ああいう人を見ると同じ社会人として嬉しくなる。

「ねー、兄ちゃんもこっちきてさ、一緒にゲームしようよー」

タブレットを握ったちっちゃな手がおいでおいでする。

「いつつもいつつも仕事仕事でさー。たまのお休みかと思つたらネットカフェ行っちゃうし」

「俺の疲れはあそこじゃなきや癒やせないだよ」

「そんなことないよーあたしが癒やしてあげるよー。ね？ ね？」

ぼんぼん、と隣のソファを叩く。

しょうがないので座ってやると、ぶつかるようにして腕に抱きついてきた。シユシユで束ねた髪からシャンプーのいい匂いがある……つつつても、俺と同じシャンプーだけど。ぐりぐり、削岩機みたいな頬ずりをかましてくる。やめる痛いだろパンツ脱がすぞてめえ。

「ほらほら、一緒にガチャまわそ？ 兄ちゃんが買ってくれた林檎カードのおかげで、無料で十連イケちゃうんだぜっ」

それは無料って言わねえ。

「ほれ兄ちゃん。ここタッチしてみ？ 兄ちゃんならSSR出るかもよ？ それ、ターッチャ……なんだよクズレアじゃん。兄ちゃんの指つかえねー。こうしてやるっ。ぱくんちよ」

俺の指を食うな、バカ妹。しゃぶるな。ふやける。

……………。

にしても、今日はすいぶんはしゃいでるな。

ひさしぶりに俺が家にいるから？ などと考えるのは、兄バカつてものか。あの親父の真似をするつもりは毛頭ないので、口には出さない。

「ねー兄ちゃん、晩ごはんどうする？ 何たべる？」

いつのまにか俺の膝上に乗っかって、足をばたばたさせている。小さなお尻が腿の上で擦れてくすぐったい。

「そうだな、出かけるのも面倒だし何か取るか」

俺たち兄妹の食事はもっぱら外食、冷食、デリバリー、もしくは近所に住む幼なじみの差し入れて成り立っている。妹はご覧の有様なので料理なんてできないし、俺だっていたいものは作れない。料理上手な主人公が妹に毎日食事を作ってる——なんてのは漫画やラノベだけの話だ。ていうか、無理。仕事で疲れて帰ってきて料理とか絶対無理。ガキの頃「テンプレ主人公」とかバカにしてごめん。あいつらマジ偉大。

「たべる、って言えばさ。兄ちゃん」

雛菜はリビングと対面式キッチンをつなぐカウンターを指さした。南里花恋からもらった紙袋が置いてある。

「なに？ なに？ あたしにお土産？ でもうちの近くにあんなお店ないよね？」

ネットカフェで知り合った女子高生のことを話すと、妹は目を丸くした。

「まさか兄ちゃん、そのJKに惚れられたん!？」

「そんなわけねえだろ」

同じ趣味ということで親近感を持たれたようだが、恋に発展するとは思えない。

「ホントに？ なんかあやし〜」

「お前と学年二つしか違わないんだぜ。男として見られるわけがない。お前だって十四五も歳が離れたリーマンと付き合おうなんて思わないだろ？」

すると、雛菜は「んー」と十五も歳が離れた兄貴の顔をまじまじ見つめて、

「それは、相手によりけり。かな」

「……マジで?」

「マジでジマ」

意外な答えだった。

自分が男子高校生だったら、二十九歳のOLと付き合おうなんて考えないけどな。そんなやつ、中・高・大通したってひとりもいなかった。

男と女じゃ、恋愛観が違うのかね。

「てゆーかさ。そもそも兄ちゃん、いまカノジヨ欲しいの?」

「あ?」

その方向からの質問は予想外だった。

想像してみる。

カノジヨのある生活。

LINEでたわいない会話をしたり。ことあるごとに動画やら画像やら送ったり。電話で互いの抱えてる仕事の話なんかしたり。ここまでいい。まあ楽しそうだ。

しかし、休みの日はどうする?」

俺の仕事は土日必ず休める仕事じゃない。休日に電話で呼び出されることも多々ある。

デート中だったら日も当てられない。機嫌を悪くしたカノジヨのために何か贈り物をし

て……ああ、金が出て行くな。貯金が減る。ただでさえ課金兵の妹を抱えているのに。

よって、結論。

「面倒くさいな」

恋でドキドキしたくない。

ドキドキするのは、クレーム対応やスタッフ同士のいさかきを仲裁する時だけで充分。恋はもう、遠い日の花火だ。

「いいのっ。兄ちゃんはカノジョなんか作らなくてもいいのっ」

ぎゅー、と雛菜が首に抱きついてきた。苦しい。

「結婚もしなくていいからね。あたしが一生めんどうみてあげっから！」

「俺が面倒みる、の間違いだろ……」

少なくとも、こいつが成人するまでは結婚しないだろうな、俺。

その後、南里花恋の手作りクッキーは二人でありがたくいただいた。

これがもう、信じられないくらい美味。

誇張抜きで、今まで食べたクッキーのなかで一番うまかったと思う。しっとり、さくさく。

「焼き菓子はあんま好きじゃないんだよね」なんて言ってた雛菜がひとくちかじるなり無言

になってしまった。甘さ控えめ、ジンジャーがぴりつときいてて、一つ食べたら後をひく。

二人して平らげ、「今日の晩ごはん、これでおしまい」と頷きあったものである。

ほっぺが落っこちる、つてのはこのことか。

……なんて。

こんな古くさい言い回しも、彼女には通じないだろう。

※ ※ ※

人から何かもらったら、きちんとお返しをしなくてはならない。社会人ですから。

幸い次の土曜も休みが取れたので、近所の果物屋で妹に選ばせたフルーツゼリーを持ってネットカフェに向かった。時刻は午後一時過ぎ。今年からっは空梅雨ゆのようで今日も快晴。家族連れで行楽や買い物に出かける車列を横目に歩道に行く。俺より若い「お父さん」が軽のハンドルを握ってるのを見かけて申し訳ない気持ちになる。独身ですまん。少子化日本はあんたに任せた。

受付でチェックインをすませてから、はたと気がついた。

今日も彼女が来るなんて、そんな保証はどこにもないじゃないか。

私立だから土曜日も授業あるだろうし、そもそも彼女がこの店の常連とは限らない。俺はまぎれもなく常連だが、あの子と出くわしたのは先週がはじめて。「また会えますか？」とは言っていたが、二週連続で来るとは限らない。

しかしその考えは杞憂に終わった。

ブースに行こうと歩き出したその時、制服姿の彼女が本棚の陰から現れたのだ。

「こんにちははつ槍羽さん！ 偶然ですね！」

「……………」

本当に偶然か？

店に来ているのはいいとして、何故タイミングぴったりで飛び出して来れるのか。まさか受付を見張ってたわけじゃないだろう。もしそうだとしたら、ずっと本棚の陰に立ってなきやいけない。花も恥じらう美少女とはいえ、その絵ヅラはかなり怖いぞ。

「今日もいい天気ですね。晴れて嬉しいです」

「……………うん、まあ、そうだな」

薄暗いネットカフェでかわす会話で、天気ほど無意味な話題があるだろうか。

「そ、それから……………ええと、今日はなんの本を読みますか？ わたしはひさびさに少女漫画を読もうかと思つて、槍羽さんのおすすめとかあれば……………あ、でも少女漫画なんて読みませんよね？ やだ、花恋つたら、男のひとに何聞いてるんでしょか……………」

頬を赤くしながら、清楚なブレザーに収まりきらないお餅の前で両手の指を絡ませあう。どうも無理に話題をつないでいる気配。会話が途切れて「それじゃあ」と言われるのを怖がっているかのようだ。

こんなところで話し込むわけにはいかないので、喫茶スペースに彼女を誘った。その瞬間、笑顔の花が咲き誇る。ぴよんと五センチくらい飛び上がって「ゆきましよう！」と行進を始めた。手と足が一緒に出ている。ネットカフェでこんなテンションのやつも珍しい。恥ずかしいからやめような。

先週の日曜と同じ席に座った。

またもや店内の注目を独り占め。視線が棘のように突き刺さる。針のムシロ。

周りを意識しないようにしつつ、

「クッキーうまかったよ。あんなうまい菓子ははじめて食った。妹と一緒にありがたかった。ありがとう」

軽く頭を下げて、それから目線を戻すと、彼女が恐縮しながら両手を振っていた。

「いえいえいえいえいえいえいえいえいえいえい！ そんなっ、あんなものでっ、あんな花恋が作ったクッキーなんかで、そんなお言葉っ、もったいないです！ 死んじやいます！」

「そんな大げさな」

「いいえ死にます！ しっ死にますから！」

「……………」
死ぬなよ頼むから。

保険も下りねえぞ、そんな死因。

「これ、お礼と言っちゃあれだけど」

持ってきた菓子袋を差し出すと、彼女はいつそう恐縮したように小さくなった。

「あの、本当にこんなお礼なんてしてただかなくても。わたしが勝手にやったことなんですから、えっと、その……」

「気にするな。単なる気持ちだから」

「いえ、本当に困るんです。だ、だってあの、今日も作ってきちゃってますし」

「は？」

「今日はクッキーじゃなくて、マドレーヌなんですけどっ」

と、またもや差し出される高級菓子店の紙袋。

……マジかよJK。

「いや、それはいくらなんでも悪いよ。受け取れない」

「そんなこと言わずに！ 早起きして作ったんです！ おいしく食べてもらえますように、受け取ってもらえますようにって呪……いえ、祈りながら作ったんです」

「いま呪いつて言ったか!? 呪いつて言った!」

「とにかくもらってください！ 死にますよ!? 死にますから!」

……。

……………あれっ？

もしかして俺、脅おどされてる？

「……まあ、それじゃあ、せっかくだから」

「ありがとうございませしゅううう〜!」

机に平伏せんばかりに頭を下げる彼女。

ぱっと顔を上げると、残念そうに言う。

「すみません。今日はこれで失礼しなきゃいけなくって」

「帰るのか?」

少女漫画がどうのと言っていたのは、やはり呼び止める口実だったのか。ちなみに俺はそっちもイケる。

「おじいちゃんとランチをする約束があるんです。……いけない、もうこんな時間!」

ぺこりとお辞儀じぎして、彼女は早足で去って行った。おじいちゃん。なんだかしっくり来る。

イメージ的におじいちゃん・おばあちゃん子ばいというか。仕草や言葉遣いが上品なのは、礼儀に厳しい戦前・戦中世代の影響かもしれない。

ん? 待てよ。

二〇〇一年生まれの孫がいるとなると、祖父母は戦後世代か。六十半なかばくらいとして、一九五〇年代生まれ？ 俺のじいさんより、親父の方に近い歳じゃないか。

「……若いな」

こんなところでも感じる世代格差。

やっぱり守備範囲外だよな。

俺だけじゃなくて、彼女の方も。

菓子をもらったからって、俺に気があると思ったらひどい目に遭いそうだな。相手が未成年なだけに手を出したら即通報、即警察。「そんな風に受け取られるなんて、思ってもみなくて。だって、十四も歳が離れてるんですよ？ ありえなくないですか？」。彼女が困惑しながら証言する様が、脳内再生余裕だった。

こう見えて保険会社に勤める身、社会的信用が重んじられる職業だ。ゆめゆめ、勘違いしないようにしないな。

※ ※ ※

タイミングが良いのか悪いのか。

翌日の日曜も、次の土日も、次の次の土日も、連続して休みを取ることができた。

休みとなれば、俺はネットカフェに行く。これはもう既定の事実である。雨が降ろうと槍が降ろうと、俺はあそこで余暇よかをすごすと決めているのだ。

行けば、必ず彼女にエンカウントした。

南里花恋。

「こ、こんにちはつ槍羽さん。またお会いしましたね！」

「槍羽さんこんにちは！ 今日ほどの本を読むんですか？」

「えへへ、また会えちゃった♪ 花恋はラッキーです。山羊座やぎざの運勢、最高ですよ！」

「おはようございまーす。早いですね槍羽さん！ わたしも今朝は早起きでした！」

「こんばんは〜。えへへ、本当によく会いますね。ぐ、偶然デスネー」

……いやあ。

偶然で三週連続ヒットつてこたあないだろ。猛打賞かよ。

しかも毎回お菓子作ってきてくれるし。パウムクーヘン、シフォンケーキ、マカロン、おはぎ、チョコレートケーキ。毎週毎週、家で食戟しょくぎでもしてんのか？

いやそれより、どの時間帯に来てみてもすぐに現れるのが不自然だ。午前に来てみても午後に来てみても、夕方に来てみても、すぐに本棚のあいだから飛び出してくる。瞳を潤ませ、息も弾ませはじせて、

主人の足にじゃれつく子犬みたいに駆け寄ってくるのだ。

まさか、朝一番に来て俺を待つてる……？

そして疑惑はもうひとつある。

会うたびに、制服のスカートが短くなるのだ。

初めて会った時はせいぜい膝がちょこんと出る程度だったのが、今はもう白くて柔らかそうな太もが^{おか}拝めてしまふ。このまま短くなっていくと、もう、はかなくてよくなるんじゃないですかね……。

短くするのは俺と会う時だけのようで、先にチェックアウトして店を出たとき、ふとガラス張りの店内を振り返ると、女子トイレから出てきた彼女のスカート丈は元に戻っていた。

「嫌な予感」は、このとき疑惑から確信に変わったといっている。

……いや、しかし、俺だぞ？

二十九歳、平々凡々なリーマンの俺を？

顔だつて特別かっこいいわけじゃない、目つき

ヤバめなアラサー男を？ あんたとろけそうなくらい可愛い巨乳女子高生が？

世界に名だ

たるJKブランドが社畜に惚れるとか、ありえなさすぎんだろ。

ありえない。

ありえない、はずなのだが……。

「兄ちゃん、これ、あかんやつだわ」

今日も今日とて、彼女からももらったお菓子（ホールサイズのアップルパイ。もう匂いだけで絶対うまそう。超手間かかってそう）を持って帰ったところ、妹はもう喜ばなかった。

「こんなん、もうガチ中のガチガチじゃん！ めっちゃ惚れられてんじゃない！ それ以外ありえないよ！」

先々週まで「こんなおいしいお菓子が食べれるんなら、そのカノジヨと付き合ってもいいよ兄ちゃん」なんて言ってた口がひきつっている。

「俺が二十一世紀生まれに惚れられるって、ありえるのか？」

「あたしだって二十一世紀生まれだけど、好きになったら歳とかカンケーないんじゃない？ なんでこんなに好かれちゃったのかはしんないけど」

「……………」

信じられん。

あの本棚で助けた一件で惚れられたんだとしたら、チョロインつてレベルじゃねえぞ。これじゃあとラックに轢かれそうなところを助けたら海でおぼれそうなところを助けたらどうなるんだ。乙女回路が熱暴走して死ぬんじゃないのか？

「兄ちゃん、その花恋つてコと付き合う気あるの？」

「ねえよ、ねえ」

すごいいい子、だとは思う。アンチJKの俺でも話しやすい。漫画やアニメの話を思う存分できるのもポイント高い。入社して以来、オタク趣味を語り合える友達なんて皆無だったからな。時々机に置いてあるジュースのおまけフィギュアを見られて「こういうの好きなんだですね」と部下に不思議そうな顔をされる程度。そういう意味でも、彼女はいい子だ。

だが、いくらいい子でも、女子高生とは付き合えない。

社畜だなんだと言われようが、会社知られたらクビが飛ぶような恋愛はできない。「君が高校卒業したら付き合おう」なんて、キープするような真似もしない。社会人として当然だ。

「傷口を広げる前に、振るしかないな」

「だね」

問題は、どう振るかだ。

もうあのネカフェに行かないようにする？ いや、あの調子だと、俺が来るまでいつまでもいつまでも待ち続けていそうだ。去り際に手紙を渡す？ ……駄目だ。自分の口からちゃんと振るのが誠実さというものだろう。

普通に付き合うより、振る方が難しい。

しかも相手は多感なJK。傷つきやすい年頃だ。思い詰めたら何をするかわからない。

「に、兄ちゃんっ！」

キッチンを振り向くと、アップルパイを切ろうとしていた雑菜の顔が青ざめていた。ていうかお前、すっかり食うんだな。

「なんかもう、手遅れだったみたい……」

「ん？」

ナイフとは逆の手に、一枚の便せんが握られていた。花柄の、薄いピンクの便せん。アップルパイの包みの下に入っていたらしい。

「あっ……」

背筋に冷たい汗が滴る。

雑菜から受け取って便せんを開くと——いかにも彼女らしい丁寧な、しかし少し震えた字でこう綴られていた。

好きです あなたの彼女にしてください

続きはGA文庫6月新刊「29とJK〜業務命令で女子高生と付き合うハメになった〜」で！